

Title	J.S.ミルの名辞・本質命題・定義について： 'denotation'と'connotation'をめぐるミルの意味論の予備的考察
Sub Title	Names, essential propositions and definitions : denotation and connotation in J.S. Mill's theory of meaning
Author	山口, まり子(Yamaguchi, Mariko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1997
Jtitle	哲學 No.101 (1997. 3) ,p.65- 85
JaLC DOI	
Abstract	J.S. Mill's theory of meaning seems to be opposite to ones which leads us to philosophical solipcism. This can be seen apparently in his statement: 'What does any one's personal knowledge of things amount to, after subtracting all which he has acquired by means of the words of other people?' He insists, 'Names are names of things, not of our ideas of them'. According to him, terms can be devided into two types: nonconnotative names and connotative names. All names (terms) are names of something, i.e. denote something. A connotative term 'connotes', i.e. 'implies' or 'means' an attribute or a set of attributes of the thing denoted by the term, while he says that nonconnotative names have no connotation and therefore no meaning. For Mill, meaning of a term is its connotation, i.e. an attribute or a set of attributes of the thing denoted by the term, something objective, not something mental. I think we can say that Mill's intention in his System of Logic is to depsychologize the theory of meaning, though whether he has succeeded in it is problematic. In this paper, I would like to clarify his theory of meaning, in which 'denotation' and 'connotation' play important roles, and criticise it, sometimes referring to other philosophers like Husserl and Wittgenstein.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000101-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J. S. ミルの名辞・本質命題・ 定義について

——‘denotation’ と ‘connotation’ をめぐる
ミルの意味論の予備的考察——

——山口 まり子*——

Names, Essential Propositions and Definitions

——Denotation and Connotation in J. S. Mill’s
Theory of Meaning——

Mariko Yamaguchi

J. S. Mill’s theory of meaning seems to be opposite to ones which leads us to philosophical solipcism. This can be seen apparently in his statement: ‘What does any one’s personal knowledge of things amount to, after subtracting all which he has acquired by means of the words of other people?’ He insists, ‘Names are names of things, not of our ideas of them’.

According to him, terms can be divided into two types: non-connotative names and connotative names. All names (terms) are names of something, i.e. denote something. A connotative term ‘connotes’, i.e. ‘implies’ or ‘means’ an attribute or a set of attributes of the thing denoted by the term, while he says that non-connotative names have no connotation and therefore no meaning. For Mill, meaning of a term is its connotation, i.e. an attribute or a set of attributes of the thing denoted by the term, something objective, not something mental. I think we can say that Mill’s intention in his *System of Logic* is to depsychologize the theory of meaning, though whether he has succeeded in it is problematic. In this paper, I would like to clarify his theory of meaning, in which ‘denotation’ and ‘connotation’ play important roles, and criticise it, sometimes referring to other philosophers like Husserl and Wittgenstein.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学）

なぜ言語の研究が必要なのか。ジョン＝ステュアート＝ミルはこれに対して次のように言っている。「言語は明らかに思考のための主要な道具の一つであり、その道具に不備がある場合、或いはその使い方を誤っている場合、他の道具以上に思考過程を混乱させ、邪魔し、ついには確信の根拠をすっかり破壊してしまう。様々な言葉の意味や正しい使い方をきちんと習得していない精神が哲学的思考方法の研究を試みることは、望遠鏡ではっきりものを見るために必要な操作を習ったことのない人が天体観測者になろうと試みるようなものだ」(SL, p. 19). 我々の思考、表現の最も主要な道具である言語を研究することは、まさに人間の思考構造、表現構造、更には理解の構造を研究することに他ならない。言語について何らかの立場を取ることは、世界の見方・捉え方とつながっている。

日本で J. S. ミルというと、倫理的には功利主義者の代表として重要視される一方、哲学的には所謂「英国経験論」の伝統の中のおまけ的存在と見做されがちではないだろうか。しかし 1843 年に書かれた *A System of Logic* における彼の立場は、安易に「英国経験論」の枠には収められないような要素を含み、また、指示の問題や意味とは何かという問題を考えていく上で大変興味深いと私は思う。既に約 1 世紀前にフレーゲやラッセルをはじめ多くの哲学者・論理学者に少なからぬ影響を与え、最近でも米国の哲学者 S. クリプケ等によって、彼の指示論が再評価されたりしている。この小論文では、ミルの意味論を理解していく上での予備的考察として、'denotation' と 'connotation' という概念に注目しながら彼の名辞、本質命題、定義についての説を検討していく（'connotation' には「共指示」という聞き慣れない日本語が訳語として定着しているようだが、ミルによって 'connote' が 'imply' 或いは 'mean' という語でしばしば置き換えられている通り、「含意する」、「意味する」と同義であることに留意して頂きたい。ここでは「含意する」と訳す）。

(1) ミルの名辞論——指示 (denotation) と含意 (connotation)

命題について述べる前に、ミルは名辞^[1]についての考察を展開している。なぜなら彼は「命題とは二つの名辞の意味の間の関係を表現しているもの (p. 90) であり」、「命題の意味は、その命題に現われている名辞の意味に依存している (p. 20)」と考えているからだ。この考えに従うと、一見彼の意味論は構成主義的であるように見えるが、果たして実際にそうだろうか。

第2章第1節の冒頭でミルはまず、「名辞とはものの名であって、我々の観念の名ではない (Names are names of things, not of our ideas)」と宣言している。これはジョン＝ロックを代表とする「概念主義者 (conceptualists)」達の、言葉は我々の内にある観念の記号であるという説に真向から対立する意見であると言えよう。例えば「太陽が日中の原因である (the sun is the cause of day)」と言う場合、ロックの説に従うなら、この文を語る人の中で、「太陽」という観念が「日中」という観念を引き起こすということを語っているにすぎないことになる。しかしミルはそうは考えない。「(上の文を口にする時,) 太陽の存在という、ある物理的事実が、日中と呼ばれるいま一つの物理的事実の原因である、と言っているのである (p. 25)。上の文は、話者の中の観念間の関係を述べたものではなく、世界における事態を述べているのである。「私がある信念を表現するためにある名辞を使う時、その信念は、ものそれ自身に関する信念であって、そのものについての私の観念に関する信念ではない (p. 24～25)」。我々は言葉を用いる時、情報を与えることを意図しているのである。故に、この著作において、名辞とは、ものについての単なる我々の観念の名としてではなく、常にもものそれ自身の名として語られるだろう (p. 25)。しかしこれらのミルの言葉は、それだけでは非常に曖昧である。ここで彼が観念と対比して「もの (things)」, 「ものそれ自身 (things them-

selves)」と言っているものは一体何なのか。このことは、彼が指示 (denote) と含意 (connote) という概念を導入し、名辞を含意的名辞 (connotative names) と非含意的名辞 (non-connotative names) に分けるところでいくらかはっきりしてくる (第2章5節)。

ある名辞が、含意内容 (connotation) を持っているか否かは、ミルの意味論において決定的な重要性を持っている。彼の定義によれば、非含意的名辞は実体 (subject) のみ、或いは属性 (attributes) のみを表す (p. 31) のに対し、含意的名辞は実体を指示し (denote subjects)、かつ属性を含意する (imply attributes)。

前者の非含意的名辞の例としては、固有名詞や、或いは「白さ」、「徳」など、ある属性を表す名辞が挙げられる。しかし属性を表す名辞については、ミルはそれらを固有名詞から区別し、含意するものを何も持たない言葉は固有名詞のみであり、「それらは、厳密に言えば、何ら意味をもたない (第2章5節)」と言う。固有名詞と同様に一つのものを指示する確定記述については、彼は有意味性を認めている。それらは一般語という含意的名辞で記述されるからだ。ここから、彼が語の意味 (meaning, significance) を、語の含意内容 (connotation)、つまり指示対象が持つ属性と見做していることが分かる。

どんな名辞も、必ず指示するものを持っている。たとえ「丸い四角」や「ケンタウロス」のように、不可能なもの・実在しないものを表わす名辞でも、それは 'a name of something' であり、'something' を指示しているのである。「ケンタウロス」や「ドラゴン」、さらには「円」や「正三角形」といった語が含意する属性を持った指示対象はいずれも実在はしないが (前者は空想上のもので、後者は理念上のもの)、ミル的に言うなら、我々が持つそうした概念を指示することになる。また第1巻第3章で述べているように、「希望」や「悲しみ」など、心的状態を指示する語もある。しかし、こうした語が指示するものが我々の内的なものであったとし

ても、語が指示するものは決してそうした内的なものについての我々の観念ではない。また、指示対象としてのある概念や心的状態が、その語の意味ではない点に注意せねばならない。ミルにとって語の意味とは、語が指示するもの（指示対象 denotation）ではなく、含意するもの（含意内容 connotation）なのである。

ミルにとって名辞は、それだけでは、たとえ意味を持っているにしても（その意味とは、その語によって connote されるものであるが）、真偽を問うことはできない。これは、「単純な思惟は真でしかあり得ない。例えば半円・運動・量などのような単純な観念がそれである」と言うスピノザの意見と異なる^[2]。例えば「太陽」という語は、それだけでは真とも偽とも言えないし、信念の内容にもならない。「太陽」、「丸い四角」、「私の父」などの語の意味に、太陽の存在、丸い四角の存在、私の父の存在は含まれない。「太陽は存在している」、「丸い四角が存在している」などの命題になって初めて、それらは我々の信念の内容となり、我々が真偽を判断することが可能となるのである。そうした命題の場合にも、「存在する」という後者の概念が、主語である「太陽」や「丸い四角」の意味に含まれると考えるべきではない（p. 22）。こちらは例えば、マイノングの説く対象論（Gegenstands theorie）などと異なる考えだろう。マイノングは、「実在（Dasein）」と「存在（Sosein）」を区別した上で、「丸い四角」のように不可能なものでも、（志向対象として）存在すると考えた。ミルにとって語の意味は、どのような場合でも存在を含むものではない。

ミルは、'John' や 'Brown', 'Mary', 'York' といった固有名詞を、『千夜一夜物語』の中で、宝物のある家に泥棒がチョークで付けた目印と類比する。固有名詞をある対象に名付ける際、理由がある場合もある。例えばこの泥棒も、ある形の目印を付けたことには理由があったかもしれないし、またある男の子を、彼の父親が John という名だから John と名付けるとか、Dart 河の河口にある町だから Dartmouth という町名を付ける

という場合もある。しかしミル曰く、「確かに我々は、他の名ではなくまさにその名を対象に与えることに、理由を持っているといえるだろう。しかし名辞は、一度名付けられたなら、それらの理由からは独立したものだ。名付ける際の理由は、名辞の意味のいかなる部分もなさない。ゆえに、事実は語の意味のいかなる部分もなさない (SL, p. 33)」。

この考えは、例えば『論理学研究』におけるフッサールの意味論と著しく異なるように思われる。この著作におけるフッサールの立場は、「意味を持つ表現を用いることと、表現することによって対象に関係すること (対象を表象すること) は同じことである (第2巻第1章15節)」というものである。フッサールは上記のミルの比喩を批判して、「泥棒のつけた白墨の棒線は単なる指標 (目印) であり、固有名詞は表現である (同16節)」と述べている。「指標 (Anzeichen)」と「表現 (Ausdruck)」はそれぞれ彼によって独自の意味を与えられており、「指標」は、語 (或いは他の何らかの記号) とそれが指示するものの間の関係が非洞察的で (un-einsichtig), その記号を用いる人によって何ら意味賦与作用 (die bedeutungverleihenden Akte) が行なわれていない記号である。記号 A とそれが指示するもの B は、それぞれ実在する事態でなければならず、それらの間には「客観的に必然的な洞察的関連の関係が成立してはいない (同第3節)」。一方「表現」においては意味作用を通じて、指標には与えられなかった必然性が、洞察性が、意味が与えられる。彼にとって意味とは、本来単に物理的存在である記号に、それを用いて何かを表現しようとする人によって賦与されるものなのである。

こうした区別に基づいて、フッサールは泥棒の印を指標と呼び、固有名詞は表現であると言う。上述の「指標」、「表現」の定義によれば、泥棒の印には意味賦与作用がなされていないのに対し、固有名詞にはなされている、という点で区別されているらしい。しかしアラビアン・ナイトの泥棒が自分の用いた印に「宝物のある家」という意味を賦与していないと、ど

うして言うことができようか。固有名詞と泥棒の印の相違といえ、前者が規則的にある社会において用いられ方が認められているのに対し、後者は個人的（しかし恐らく社会的に認識可能）であるという点のみである。フッサール自身、日常的な伝達の場面においては上記のミルの比喩の正当性（固有名詞と泥棒の目印の特徴の区別不可能性）を認めている。伝達においては他者間を結ぶ、知覚可能な、実在する記号（指標）が必要であり、それは同時に話し手によって意味賦与作用をなされた「表現」でもあるのである。「金の山」などの例を出しながら、彼は語の対象と語の意味を区別しようと試みているが、固有名詞に関してはその区別は不可能と断言していいだろう。「John」や「花子」、「東京」は、これらの語によって指示される対象以外に、分析されるべき内容を持たない語である。ミルが述べるように、固有名詞に限らずどんな語（記号）も、その指示対象或いは意味内容と、何か必然的な関係を持っている訳ではない。あるものを表わすために、ある音や形の語が用いられるようになるのは、任意のことである。といってもこの「任意」とは「自分勝手に」、「あてずっぽうに」という意味ではない。ヴィトゲンシュタインは『論理哲学論考』の中で、「私達の記号法には、確かにいくらかの任意性がある。しかし何かを任意的に規定してしまえば、その時には、他の何かは必然的にそうなるということ。このことは、決して任意的ではない(3. 342)」と述べているが、まさにその通りである。たとえ名付ける際に理由があったとしても、その理由は語の意味に含まれるものではない。語の意味には、フッサールが表象と呼ぶ作用をはじめ、それをを用いる人間の如何なる心的作用も含まれない。「事実には語の意味の如何なる部分もなさない」というミルの立場は、言語の自律性を主張したヴィトゲンシュタインのそれに通じるものがあるように思われる。ある個々の事実や現象が、語の含意内容、つまり意味を作り上げていくことはミル自身が認めるところである。我々の言語は、現実との対応なくしては意義を持たない。しかし語の意味とは、そうした個としての

事象ではない。

さて、脱線したが、次にミルによって非含意的名辞から区別された含意的名辞 (connotative names) について見てみよう。先に述べた通り、connote という動詞は imply, involve, indicate という動詞で言い換えられ、更には「意味する (mean)」と同義でも用いられている。含意的名辞は指示対象 (denotation) と含意内容 (connotation) を共に持つ語である。非含意的名辞が抽象名辞と具体名辞からなるのに対し、含意的名辞は具体名辞のみからなる。また、含意的名辞は denominative であるとも言われる。含意的名辞によって指示 (denote) される実体は、同じ語によって含意 (connote) される属性によって denominate (外的指示) されるからである。含意的名辞は、それが含意する属性に先立ってあるのではなく、それらの属性の後にある (p. 92)^[3]。

名辞が含意するものとは何か。ミルは、先にも引用した通り、含意内容を持たない語 (固有名詞) は、「厳密に言えば」という但し書き付きだが) 意味を持たないと考えている。「名辞の意味は、それが指示するものではなく、含意するもののうちにある (meaning resides not in what they denote, but in what they connote. p. 34)」。そしてその「含意するもの」とは、ミルによると、語によって指示される対象の持つ属性 (の集合) であった。彼は個物は本質を持たないと考える。固有名詞には含意するものがないと言っていることから、含意内容を持つ語は二つ以上の対象について述語付け可能な語であることになる。共通する要素を持つ二つ以上のものに冠されて初めて、ある語は含意する属性を持つことになる。例えば「人間」という語を例に挙げてみよう。この語が指示するものは、John, 花子, Peter, 太郎, Mary, …と、とても数えきれない。また人間と呼ばれる存在は、現在に限らず、過去にもいたし、未来にもいるだろう。しかし「人間」という語の意味はこの語によって指示されるもの、これらの個物たちではない。もしそうだと考えるなら、「人間」という語は

時間を通じて（今この瞬間にも、どこかで新しい人間が誕生しているだろうから）意味の異なる語となってしまうだろう。「人間」は膨大な広がりを持つ多義語となってしまう。ミルも述べている通り (SL, p. 94~95), 一般語を用いる時, その外延を我々が全て把握しているかということ, そうではない。もし一般語の外延がその語の意味であるなら, 我々は意味の分かっていない語を用いていることになるが, これは奇妙な話である。語の意味とは, その語の含意内容, つまり指示対象の持つ属性のうちにある。「人間」は, この語の指示対象が共通に持っている属性の集合, 即ち, 肉体を持ち, 生命を持ち, 理性があり, 然々の外見を呈していることを意味する。そしてミルは次のように言う, 「対象に与えられた名辞が何らかの情報をもたらす時, つまりそれらの語がきちんと意味を持っている時, その意味は常に名辞が含意するもののうちにある」(p. 34)。彼にとって有意義性とは, 情報量があること, 何らかの知識をもたらすことと同義である。だが情報量の有無は含意内容の有無と常に一致するのだろうか。この点は後に再び言及する。

注意せねばならないのは, ものの属性とは単に指示されることもあり, それらが指示される場合と含意される場合とではどのように異なるのか, という点だ。ミル自身ははっきりとした言葉で説明してはいない。しかし彼の挙げた例によれば, 「白さ (whiteness)」や「徳 (virtue)」は「属性のみを表わす (signify an attribute only)」(ミルにとって 'signify' という語は, ある語があるものを表わす, という程度の意味で, 指示 (denote) という仕方で表わす場合にも含意 (connote) という仕方で表わす場合にも用いられている。この場合は前述の定義からも明らかなように「指示する」という意味で用いられている)。一方これらを形容詞にした「白い (white)」, 「有徳の (virtuous)」の場合, ミルによれば, 前者は「雪や紙や海の泡など全ての白いもの」を, 後者は「ソクラテス, ハワード, マン・オブ・ロス (Man of Ross), そしてその他, 過去, 現在, 未来におけ

る数えきれない人々」を指示し、且つ、前者は「白さ」という属性を、後者は「徳」という属性を含意している (p. 31). 指示される属性は、大きく質・関係・量の3種類に分けられるが、それらは「(それらによって引き起こされる) 感覚か、或いは何らかの意識状態によって以外、我々に知られることがない」ものであり (SL, p. 76), いわば個としての属性と考えてよいだろう. といっても、この表現は誤解を招くだろう. 彼は個物は本質を持たないと言っているからだ (属性とは本質と、本質的諸性質から成る). 彼によると、「通常の言い方に従って、それら (属性) を〈もの〉のクラスの中のものとして語ってきているとはいえ、我々は、それらの属性を述語付ける場合、感覚や意識状態以外の何物をも述語付けてはいないということを示した. そうした感覚や意識状態がそれらの属性の基盤となり、且つそれらによってのみ属性は定義付けや記述が可能なのだ (p. 76)]. 名辞によって指示されるもの (things denoted by names) のクラスに入れられる属性、いわば個としての属性は、結局のところミルによれば、個々の感覚や意識状態に他ならないということになる.

他方、含意される属性は、「固有名詞には含意される属性がない」、「複数のものに述語付け可能な語が、含意される属性を持つ」という言葉から、(ミルによれば究極的にはある感覚や意識状態によって知られる個としての属性を) 普遍化・一般化した属性であると言えるのではないだろうか. ミルは含意内容としての属性を、ロックの 'nominal essence' と類比している. しかし彼は同じくロックによって区別されたもう一つの本質 'real essence', つまり「個物の本質」というものは認めない (ロックにとってすら、こうした個物の本質が何であるかは、我々には知られないものなのである). 「個物の本質とは、クラスの本質の誤解から生じた無意味な虚構である (p. 114)]. これは、固有名詞には含意される属性 (ものの本質と本質的諸特性から成る) がない故に無意味であるという彼の言葉と結びつく. また前述の通り、彼は含意的名辞の意味に存在を含むことを認

めない立場にあるので、含意される属性とはあくまで、個々のものの経験からの一般化によって得られた記述であると考えてよいだろう。

ところで、ある語が指示するものの属性とは、ミルが言うように簡単に挙げられるものなのだろうか。例えば上に挙げた「人間」を例にとってもよい。ミルは人間の属性は、肉体・生命・理性・然々の外形を持つことだといっている。前者二つだけを考えるなら、該当するものは他にもあるだろう。決め手となるのは後者二つの方だ。しかし果たして理性とは、どの程度のものを基準としているのだろうか。赤子や幼児と成人とでは、同じ「人間」という語を冠することができるかどうか疑わしくなるほど理性の程度に差があろうし、成人同士でも、例えば知能障害のある人とそうでない人とでは差がある。また、知能障害を持たない人同士の間差もピンから切りまでである。外形に関してはもっと明らかな多様性が簡単に見て取れる。体のどこが欠けたら人間という語では呼べなくなるのだろうか。両目の間が馬並みに離れている人は、人間と呼ばれるべきではないのだろうか。もしそうなら、人間と呼ばれるための許容範囲は何センチメートルまでなのか。

(2) ミルの本質命題、或いは verbal propositions と 定義について

以上、ミルの名辞に関する考えを見てきたが、名辞が含意するもの（属性）については、どこまでを属性と呼ぶべきかという疑問が残る。これはある語の定義付けと深く関係する問題である。ミルは定義とは「語の意味をはっきりと表わした命題 (a proposition declaratory of the meaning of a word)」であり、「主語にくる名辞によって一括できる全ての**本質命題**の集合である。(主語にくる) 名辞において真理が含意 (imply) されているような全ての命題、その名辞を聞いただけで、我々が知ることできる全ての命題が、定義のうちに含まれる (SL, p. 134)」と言う。ライアン

が述べている通り、「ミルによれば含意 (connote) するものを持たない名辞は意味を持たず、定義付けられることもない。なぜなら定義が、ある語に含意内容を与えるからだ」^[4]。固有名辞は本質を持たない故に、本質命題の集合としての定義を持つことができない。また、(特に 146 ページなどで) ミルは、語の含意内容 (connotation) を与えるところの定義の中に「存在」は含まれない、定義とは名辞の、つまり言葉の定義であって、もの (things) の定義ではない、と述べている。彼にとって定義とは、「この語は然々の意味で用いる」ということを主張する命題なのだ。

ミルは命題を「本質命題 (essential propositions)」と「偶然命題 (real propositions)」に区別するが、そもそも彼にとって命題とは何か。冒頭で述べたように、ミルは「命題とは二つの名辞の意味の関係を表現しているもの」であり、「命題の意味は、その命題に現われている名辞の意味 (つまり名辞の connotation) に依存している」と考える。彼の論は、ホッブズのように「命題とは二つの名辞の意味の一致・不一致を表わしたものである (a proposition is the expression of an agreement or disagreement between the meaning of two names)」と考え、連辞 (copula) を指示的に解釈する極端な唯名論者と、「命題とは二つの観念の関係を表わしたものである (a proposition is the expression of a relation between two ideas)」と考える、伝統的な実在論者 (概念主義者) の説への反駁として進められていく。彼は連辞の曖昧性 (ambiguity) について述べ、一般語の表わす普遍概念の実在 (いわゆる 'secondary substance') を仮定するような考えは、連辞の曖昧性から生じた誤った結果であると言う (p. 78~80, p. 113)。

「本質命題」はしばしば 'merely verbal propositions' とも呼ばれ、'real propositions' と対比される。後者においては事実に関する事柄 (matters of fact) が主張されているのに対し、前者の本質命題は、Jong が述べているように^[5]、ロックの trifling propositions, 或いはカントの

分析命題と同じものと考えてよいだろう（後者との類似性についてはミル自身も認めている）。ミルの定義によれば、「AはBである」という形の命題において、様々な属性を持つ（含意する）名辞Aを、その属性のうちの一つか、或いはAが含意する属性の集合の中で、Aより少ない数の属性を含意する名辞Bで述語付ける場合、その命題を本質命題という^[6]。

第二実体を認めないミルは、本質命題の場合、命題の主語の实在は、単に見かけだけ、述語のうちに含まれている（The actual existence of the subject of the proposition is … only apparently, not really, implied in the predication, if an essential one. p. 113）と考える。例えば「亡霊は肉体を持たない精神である」という場合、亡霊の現実的な存在を信じている必要はない。しかし、「AはBである」の「B」が、Aの本質(essence) 或いは本質的性質(essential properties)——これらを合わせてAの属性と呼ぶのだが——を表わさず、偶然的な要素を表わす場合（これをミルは‘real proposition’と呼ぶ）、例えば「殺された人の亡霊が殺人犯のカウチに取り憑いている」といった命題は、亡霊の实在の信念が含意されているものとして理解された時にのみ意味を持つだろう、でなければ話者が聞き手に、本当に起こったことだと信じてもらいたいことを主張しているのだろう、とミルは言う。しかし「亡霊の实在が含意されている場合にのみ意味を持つ」という彼の発言は、今までの「含意内容(connotation)=意味」、「語の意味に存在は含まれない」という彼の説から一步踏み出しているのではないだろうか。ここで彼が言う「意味」とは含意内容のことではなく、先に挙げた情報量のことだろう。

本質命題については、その全称肯定命題は真になる。しかし情報量はない。例えば「全ての人間は理性を持つ」、「全ての人間は肉体を持つ存在である」、などの命題は、ミル曰く、「人間」という語の全ての意味(the entire meaning of the word ‘man’)を既に知っている人には、何ら知識をもたらさない。なぜなら「人間」という語の意味は、これらのことを全

て含んでいるからだ (p. 112). 先に挙げた 34 ページの引用から分かるように、ミルにとって有意味であることは情報量があることでもあった。ミルは、これらの命題が無意味であるとは言わないが（「人間」は含意内容を持つ語なので）、恐らく「人間」という語の意味を知っている人には、改めて言われることに意義はないと考えているのだろう。唯一の有意義な (useful) 本質命題は、定義であると言っている。「人間」の意味を知らない人にとっては、上の諸命題は（「人間」の定義として）情報量を持つ。命題の有意味性が情報量の有無と重ねられ、状況に依存している点で、ミルは必ずしも、命題の構成要素である語の意味から命題全体の意味が分かるという、一種のアイデア論的な構成主義者ではないと分かる。だが先にも述べたように、ある語に情報量があることは、必ずしもそれが含意内容を持つことを意味しないだろう。例えば固有名詞が語られる場合、それらが情報量を持っていないとは言えない。しかし固有名詞は彼にとって含意内容を持たない故に無意味なのである。

先ほど挙げた問題に移ろう。我々は、ある語の指示対象の属性（つまりある語が含意するもの）からその語を定義付ける際、その語が含意する内容をどこまで把握すべきなのか。ものの属性のクラスはどのように限定できるのか。「〈人間〉という語の全ての (entire) 意味」という表現は、語の意味が何かははっきりと数え挙げられるものであるかのような印象を与えるが、これはどういうことなのか。ある名辞 A の「全ての」意味とはつまり、ミルにとって、A によって含意される属性の集合のことである。「人間」の場合、その語の全ての意味とは、理性があり、肉体と生命を持ち、然々の外形を持つ、ということだ。しかし先に述べ、ミル自身も認めているように、理性といってもこれ以上なら理性がある、これ以下なら理性はない、と言えるような明確な基準があるわけではない。「然々の外形」も同じような曖昧さを持つ。手足や耳の形も個人差があり、体のある部分が欠けている人も、よほど奇妙な欠け方でない限り（頭部がないとか、胴

体がなく足の上に直接頭が生えている、など) 人間と呼ばれるだろう。こうした個々の差異を乗り越えた上で、我々は如何にしてそれらを「人間」と呼ぶのか。

あるクラスを他のクラスから区別する基準として、定義ではなく、最も理想的な「タイプ」なるものを導入する説に、ミルは反対している (p. 717~721)。これはウィーヴェルという人の説なのだが、この説によれば「タイプ」とは、「クラスの特徴を顕著に (eminently) 持つと考えられるもの」である^[7]。ミルはこれに反対して次のように言う、「私はあるグループが形成される際〈タイプ〉によって決められ、ある種があるグループに属しているかどうかを決める際に、諸特徴ではなく〈タイプ〉が言及され、そうした諸特徴は言葉では表わせないというウィーヴェル氏の説には賛成できない。この説は、ウィーヴェル氏自身の、クラス分けの根本原理、即ち〈一般命題は可能である〉に整合的でない。もしクラスが何らかの共通の特徴を持っていないなら、それについての一般命題がどうして可能だろうか。クラスのものそれぞれ、他のクラスのものに対する以上にお互いに類似しているということがなかったら、そのクラスについて何かを述語付けることもできまい (p. 721)」。 「故にクラスは、構成者に一般的に見られる (universal) 特徴を全て持つことによって構成され、それらの多くは例外を認めるのである (p. 722)」。 ここには、個体差や例外という現実を認め、類似という概念を重視するミルの柔軟な姿勢が見られる。

語の含意内容に曖昧さがあることは、ミルが「一般名辞とはある有限個の対象に付けられた記号ではない」と言っていることと関係するだろう。先に「人間」という語を例に挙げたが、彼の言う通り、「あるクラスを構成する対象は常に変動している (fluctuating)」。我々はクラスを構成する個物の一つ一つを知らなくてもあるクラスを限定することができるし、あるクラスを構成するであろう構成要素を全く知らなくても、つまりそうした構成要素が全然存在しないとしても、あるクラスを限定できるだろう。

もし一般名辞の〈意味〉を、その語が名であるところのもの（その語によって指示されるもの）と理解するなら、偶然でもない限り、どの一般名辞も定まった意味を持つことはないし、更には同じ意味を長く保つこともない (p. 94~95)」。我々の一般化の能力とは、時空を超えて全てのものを経験した上で行なわれることを前提とはしていない。そんなことは不可能だ。名辞が共指示する属性についても、我々は、全てのサンプルを観察した上でその標準値を採るのではない。一般名辞の指示するものが変動するように、そして指示されるものはそれぞれ同じ名で指示されながらも異なる個物であり個体差があるように、属性にも、属性の主である個物の個体差に応じて変動が、揺れが、曖昧さが見られるのである。それを認めた上で、我々は個々の経験から一般化をしているのである。

ある語がある意味を表わすことは任意のことであるとミルは言う。ある語は、それをを用いる人の「意味作用」によって意味を持つのではない。ある語の定義となる本質命題は、彼によれば、「厳密な意味では真偽を問えない。ただ使い方や慣習に沿っているかいないかが言えるだけである。それらの命題が証明できることは、（その語の）使い方の証明である (proof of usage)。つまり、その語が他の人々によって、それをを用いようとする話し手（書き手）の認めるような仕方で用いられているかどうかということの証明だ (proof that the words have been employed by others in the acceptance in which the speaker or writer desires to use them. SL, p. 109)」。ミルの言う「任意」とは、ある人が好き勝手に記号に意味を賦与できるということではない。「真偽が問えない」というのは、「〈蟻〉という形（或いは音）の記号は、本当にこれ（と言って一匹の蟻を指差す）を意味しているのか？」とか、「然々の属性を持つものを、〈蟻〉という記号で呼ぶことは、本当に正しいのか」という類の問いには意味がないということである。ある語がある意味を持つことはある一個人によってではなく、一つの社会によって認められねばならず、それは使い方によって

証明され得るものである。辞書に見られるような定義とは、ミルによれば、こうした使い方を規定する基準のような役割を果たすものなのだ。そしてその基準も、「言語とは作られるものではなく成長するもの」という考えを受け入れているミルにとっては、必ずしもこの世から超越したところにあるものではなく、使い方の変化による揺れ (fluctuation) を排除しないようなものなのである。

* * *

さて、こうしてミルの名辞、命題、定義についての論を見てきたわけだが、明らかに反論したくなることも幾つかある。例えば固有名詞には意味がないということは、我々の直観に反するし、ミル自身にとってもそうだったのだろう。その思いが「厳密に言えば意味がない」という但し書きを彼に付けさせたのだろう。また『ウィリアム＝ハミルトン卿の哲学に関する考察』(1865)には、「それら(固有名詞)の持つ唯一の意味とは、それらが指示する個物である (The only meaning they have is the individual whom they denote)」と書かれ¹⁸⁾、名辞が指示するもの (denotation) と意味の関係が肯定的に述べられている。意味というものが、記号を用いて我々に理解される何かであるなら、明らかに我々は固有名詞を用いて、それが指示するものを理解している。固有名詞が何かを表わすように用いているのだ。ミルが時折有意味性の基準とする「情報量を持つ」、「知識をもたらす」という要素が、具体的にどのような状況を意味するのかは問題だが、我々は固有名詞を用いながら情報を伝達することも多々あるので、その意味では固有名詞も有意味なのではないだろうか。ある物理的な形を持つ記号と、その記号によって指示されるものの関係は、ミルの言う通り、確かに任意のものであるが、個人の意志で決められるものではない。それらは規則に則って用いられている。この点は固有名詞もその他の名辞と同様である。とすれば固有名詞に意味がないと考えるのは非常に不自然である。

また、彼が時折見せるいわゆる経験論的な考えは、本当に彼の意味論と整合的であるかどうか疑わしい。ミルは第1巻第3章「名辞によって指示されるものについて」において、語が指示する対象（実体や属性など）を、その対象によって我々のうちに生じる感覚や意識状態などの内的なものと同一視し、我々に知り得るものは自分の感覚のみであるという立場をとろうと、対象は我々の外に実在するものであり、我々が知るものとは自分の感覚といった内的なものではなく、対象それ自体、或いは対象自身が持つ属性であるという立場をとろうと、それは論理学にとって決定的な重要性を持ってはいないと言う（SL, p. 65 など）。だが果たして本当にそうだろうか。ロック等の用いる「観念 (idea)」という語の解釈については、それ自体で問題にすることもできるのだけれど、ともかく、もしミルが「名辞とはものの名であって我々の観念の名ではない」という、最初に宣言した立場を貫こうとするならば、上に挙げた前者の立場は捨て去るべきものではなからうか。

ミルは経験という語を二通りの意味で用いている^[9]。一つは、上に挙げた二つの認識論的立場の前者に見られるような、何かを経験している際の感覚・意識状態のようなものであり、これはラッセル等の感覚所与説へとつながる立場だろう。もう一つはほぼ「観察」と同義である。ミルが己れの経験主義の立場を「全ての知識は、経験からの一般化によって得られる」と述べる時、彼の立場がいわゆる経験論とは異なり、経験という語を後者の「観察」と同義で用いていることを示しているように思われる。このことは、彼が名辞の含意内容・内包の揺れについて述べながら次のように語っているところからも分かる。「……これが我々が最初に日常言語の知識を習得する仕方なのであり、これ以外にはあり得ないのである。子供は〈人間〉や〈白い〉という語の意味を、それらの語が様々な個物に適用されるのを聞くことによって、また、一般化というプロセスと、彼自身では記述できないような分析でこうした個々に異なるものが何を共通に持つ

ているかを発見することによって、学ぶのである (SL, p. 37)」。]

個々の経験だけでは知識は成り立たない。確かに、ものの知識を得る際の経験の重要性を我々は無視することはできない。しかしいくら個々の経験を積んだところで、何らかの一般化、抽象化をしない限り、我々は自分の経験している感覚や意識状態など内的なものしか知り得ないという立場から抜け出ることができない。特にものの存在は、個人の感官に得られた印象からだけでは得られない。だがものの存在が、個人の内的なものとしてではなく、誰もがアクセスを持つことが可能な外的なものであって初めて、我々の経験内容は、他人との比較を通じて真偽を言えるようになるのである。言語についても同じことが言えよう。名辞の指示対象が単に個人の観念であったり、名辞の含意内容（意味）が感覚など個人の内的な現象であったりしたら、我々にとって相互理解は不可能だろう。ミルの意味論は、この点では非難を免れているように思われる。だが数学的諸概念などは、個々の観察や経験から一般化されて得られるものではない。我々の用いる言葉の全てが、個々の経験からの一般化による含意内容を持つ訳ではない。この点でミルの説は、意味一般の理論としては成立していない。

いずれにせよ、ミルが「名辞とはものの名であって、我々の観念の名ではない」という姿勢を貫くなら、個人の感覚を重視するような立場、ラッセルのように感覚所与を根源的な知識とする立場は、捨てるべきものである。「(科学的な専門用語とは異なり、) 定義について考える以前に我々の口にのぼる (日常の) 言葉は、その含意内容を、ただその語が発せられる際に習慣的に心にもたらされる諸々の出来事 (circumstances) からのみ得るのである。そうした出来事の中でも、名辞によって指示されるものが共通に持つ性質が、本来主要な位置にある。そして言語が個人の習慣 (custom) や偶然にではなく、社会の慣習 (convention) によって規則付けられているのなら、そうした性質が唯一の位置にあるはずである (p. 686)」というミルの立場は、語の意味であるところの属性は、指示対象

を知覚する人の内側にある，感覚所与のような個人的なものではなく，指示対象自身が持つ属性であり，誰にでも観察可能である点を前提としている。

[注]

*本文中のミルの引用の頁数は全て *A System of Logic, Collected Works of John Stuart Mill*, vol. 8, Edited by J. M. Robson, Introduced by R. F. McRae, University of Toronto Press, Routledge & Kegan Paul, 1973 による。日本語訳は筆者による。

- [1] 名辞 (names): この語はミルの意味論において名詞のみを指しているのではなく，共義語ではない語のことを指している。‘term’と同じ意味と考えてよいだろう。
- [2] スピノザ著『知性改善論』p. 59-6 (畠中尚志訳，岩波文庫)。
- [3] 一般語などの含意的名辞は指示対象 (denotation) と含意内容 (connotation) を持ち，後者によって前者が決定されるとミルは考える一方で，非含意的名辞 (含意内容を持たない語) も指示対象を持つと考えている。だが，彼の基本的な立場は以下のように Jong がまとめている通りである：「ある語がある対象の名となるのは，その対象が，その語の外延 (denotation) に属しているからではなく，その語の含意内容を形成する属性を持っているからである。(ホップズのように命題を外延的に解釈する)〈外延主義者〉達への批判の焦点は，(具体)語によって指示される対象の集合は，含意内容に対して，またそれ故に命題におけるその語の使用に対して第2次的なものであるという確信だ。〈我々は個物を，命題が真である故にあるクラスに入れるのであって，その対象がそのクラスの中にあるために命題が真になるのではない〉(SL. p. 95)。この立場を守りながら，私は既に繰り返し，ある名辞は，それらが(真に)述語付けられる対象の名であることを見てきた。名辞の指示対象は，ミルによれば，ただその語を述語として用いることを通じてのみ決定可能なのである」(W. R. de Jong: *The Semantics of John Stuart Mill*, Reidel Publishing Company, 1979, p. 131-2)。
- [4] Ryan, Alan: *J. S. Mill*, Routledge & Kegan Paul, 1974, p. 65.
- [5] Jong: *The Semantics of John Stuart Mill*, p. 148.
- [6] 例としては，「人間は理性的な動物である」，「人間は二本足である」など。
- [7] Whewell, William: *History of Scientific Ideas*, London, Longman, 1830,

vol. 2, p. 120-122 など参照. ミルによる引用は *A System of Logic*, p. 717-8.

- [8] *An Examination of Sir William Hamilton's Philosophy*, Vol. 9 of *Collected Works of John Stuart Mill*, Routledge & Kegan Paul, 1972, p. 340.
- [9] *System of Logic* の McRae による Introduction, xxii 参照.